

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文章とはどういうふうな順序で生み出されるかということから考えてみます。すると、まずなにか書きたいという「思い」が心のなかに萌もしてくる。それが第一の着手です。もしなにも書きたいことが心のなかにないのなら、文章を書くには及びません。また、事務的書類だとか、定型的小書簡しょうかんのようなものはなにも文章作法にはかわからず、ただひながたを求め来て、それを敷しき写しすれば事足りるでしょう。そこで、心のなかにかを思ったとして、それを文章にするときには、まずだれでも、心のなかでそれを呟つぶやいてみるにちがいません。ああ、こんなことが言いたいぞ、いや、そうじゃない、あんなことから述べてみたい、などと、あれこれ考える。

この過程では、文章はまだ星雲のようにふわふわと心のなかに浮かんではいるに過ぎません。それが文章という形になるためには、ひとまず「心のなかで語ってみる」そしてその心のなかの「一人語り」のままに文字に綴つづってみる、という手順が必要になります。

もし、この過程で、文章のもとになる「一人語り」の言葉そのものが貧弱ひんじやくであつたら、それを綴った文章もまた貧弱なものになり、もしそれが下品であれば、文章もまた品下しんくだるものとならざるを得ない。子供じみた言葉しか知らないとすれば、書いた文章も子供の文章になってしまうし、老いの練くり言ごとみごといたいなことを書けばそのままジジムサイ文章にもなりましよう。

つまり、文章はその根のところに、各自の「話し言葉」が伏在ふくざいしているはずなので、そこをよく矯正きようせいし磨みがかないと、必然的に文章もまた磨みがかれないということになります。

だから、日ごろの話し言葉こそ、もっとも大切な文章の要素だと私は考えるのです。⁽²⁾そこでなにはともあれ、まずは話し言葉でも文章でも「上品」な表現を目指したいと思います。同じことを言うのであつても、下品な文章には説得力がないからです。

1 「ためぐちをさくく」などということをも、最近をよく申します。もともとこんな言い方は、ごく品の悪い言い方で、昔はキョウヨウある大人は決して口にしませんでした。同じように、自転車を「チャリンコ」、学生服を「ガクラン」、一人称複数ひとりじんたすう(場合によっては単数にも使う)を「ウチラ」などという口語表現は、ヒョウジュンひょうじゆん的な東京の言葉の位相ちさうからすると、最下層に属する下卑げびた言い方で、心ある人が聞けば眉まゆをひそめるにちがいない。それが、テレビや漫画本などの影響えいぎやうか、このごろでは高校生あたりはだれでも平気で口にし、甚はなはだしきはその親の大人までが、別に悪い言葉を使っているという自覚なしに、そんなことを口にするのを耳にします。こういう状況じやうきやうのなかから、品格ある文章が生まれてくるとは思えません。

したがって、まずもって大切なことは、自分がいま話している言葉が、はたして上質な言葉であるか、それとも下劣げれつな言葉であるか、という「自覚」です。いま自分が使っているこの言い方が、はたして品格ある言い方なのか、それともいかにも感心しない下卑た言葉なのか、それをいつもいつも意識していなくてはなりません。⁽⁴⁾良い言葉は一日にしては成りません。

かつて世阿弥せあみは、その能楽の伝書『花鏡かきやう』のなかで、「見所けんじよより見る所の風姿は、我が離見りけんなり。然しかれば、我が眼の見る所は、我見がけんなり。離見の見にはあらず。離見の見て見る所は、則すなわち、見所同心けんどうしんの見なり」と説いています。かいつまんで言うと、これはこういうことを言っているわけでは

「観客席から見るところの自分の姿というものは、自分にとっては『向こうから見見る見方』(A)的視線」である。そうすると、自分のほうから自分を見るのは『こっちから見見る見方』(B)的な見方」である。この我見は決して客観的きゃくくわんてきなものを見ていのではない。けれども我意がいきを離はなれて向こう側から自分を見直してみる、それすなわち、見物人がどう見るかということと同じはずだ」

2 ここでは世阿弥が言っていることは、芸というものは、独りよがりではいけない、いま自分の演じている姿を、いちど冷静に自己を離れて、見物人から見たらどう見えるかという立場に立って見直してみるがよい、というのであります。

じつに透徹とうてつした、そして合理的なものの見方で、世阿弥はこれを能の演技について述べたのですが、ちょっと見方を変えると、なにも能のことだけでなく、表現ということ一般いっぱんに押し広げて適応ていおうできる考え方だと思います。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

とうとう、自己紹介の順番が来た。ダイアナはしぶしぶ立ち上がった。教室中の視線がこちらに集まるのがわかる。根元が黒くなり始めて。パサパサした金髪頭、くだらないアニメのTシャツ、とがった顎、やせっぽちの薄い体。自分でも嫌になるくらい鋭く大きな目に、皆が好奇のまなざしを向けている。

「矢島ダイアナです。本を読むのが好きです」

出来るだけ小さな声で言い、すぐさま椅子に腰を下ろす。周囲と目を合わさないように膝小僧を見つめた。皆がひそひそ話しているのがわかる。

「ダイアナだって！ あの子、外国の子？」

「違うよ。私、二年の時一緒だったけど、日本人だよ。確か、公園の近くのアパートにお母さんと二人で住んでるの」

「へえ、でも、髪が金色だよ」

「あれ、根っこは黒いじゃん。へんなの」

「染めたのかな？ 子供がそういうことしていいの？」

お調子者らしい男子が右手を耳につけてぴんと伸ばした。

「ねー、ダイアナってどういう字書くの？ カタカナ？」

「……大きい穴」

消え入るような声でつぶやくと、どっと笑いが起きた。

(中略)

ピンク色のカーディガンを羽織り、髪を編み込みにした女の子が、ダイアナのところにつかつかやってきた。

「ねえ、その髪の毛、どうしたの？ 自分で染めたの？」

気の強そうな味噌っ歯が唇から覗き、

1

尋ねられた。

「ううん……。ティ……。ええと、お母さんが」

「へえ、うちのママが言ってた。子供のうちに髪を染めたり、脱色すると、健康によくないんだって。大きくなれないらしいよ？ 矢島さんのお母さんって変わってるんだね」

訳知り顔で、周囲に聞かせるように声を張り上げる。何人かの女の子が振り返ってじろじろとこちらを見ている。出会って間もないのにどうしてこちらを攻撃するような真似をするのだろう。恐れる気持ちを堪え、上目遣いで観察していると、味噌っ歯はおびえたような色を浮かべた。みんなそうだ。話しかけてきたのはそっちのくせに、ダイアナが大きな目で見つめ返すと、大抵の子供は怖がって先に目を逸らす。

「なに、その目。にらむことないじゃない！」

にらんだつもりなんてない。びっくりして何か言い返そうとしても言葉が出て来ない。

「私、なんにも悪いことなんて言っていないじゃない。なによ、ダイアナなんて変な名前(1)のくせに。あんたのママ、おかしいよ！」

味噌っ歯の言う通りだった。ティアラは確かにおかしい。どうして普通のお母さんのようになれないのか。わざわざ指摘されなくても、ダイアナはいつもため息をつきたいような思いで生きている。どうしてみんなはダイアナを放っておいてくれないのだろう。自分が人を不快にする存在だということくらい、よくわかっている。好かれようなんて思っていない。ただ、静かに過ごせればそれでいいのに。

「ダイアナは変な名前じゃないわよ。みかげちゃん」

すっと胸がさわやかになるような、よく通る声をした。振り向くと、真っ黒なおかっぱ頭の女の子がにこにこしていた。真っ先に、綺麗な子だ、と思った。華やかな顔立ちではないが、目鼻だちが整っている。陶器人形のようなめらかな肌、形のよい広い額はいかにも頭が良さそうで、髪はお習字の墨のように黒々とつやがある。着ているものは地味なブラウスと紺色のスカートだけど、パリッとしていて清潔なインシヨウだ。明らかに、他の子とは何かが違う。

「『赤毛のアン』って知ってる？ アン(2)の親友はダイアナって言うんだよ」

わあ……。ダイアナは目を丸くする。『赤毛のアン』はほとんどベストワンと言ってもいいくらい、大好きな一冊だ。暗記するくらい何度も読み返している。アンというおしゃべりで空想好きな女の子が好きでたまらなかつたし、いちご水やパフスリーブ、ハートのキャンディなど可愛いものや美味しそうなものに満ちている。ダイアナは

国語問題

(七枚のうちの四枚め)

アンの自慢の美しい親友で、どんな時でも心が通じ合っている二人の関係がうらやましかった。こんな風に本の話
を誰かと出来るなんて……。みかげちゃん、と呼ばれた味噌っ歯はなんだか [2] 肩をすくめた。

「知らない。私、本なんて読まないもーん。彩子ちゃんと違ってね。ママは読め読めうるさいけど」

みかげちゃん、とやはらはどうやら彩子ちゃんに一目置いてるらしい。たしなめられた時に、ひどくキズ付いた
顔をした。彩子ちゃんという女の子にはおしとやかに見えて、周りの人をぐっと納得させてしまうような芯の強さ
が感じられた。

「もったいない。とつても面白いんだよ。ああ、ダイアナなんて名前で羨ましいなあ」

女の子はこちらをまっすぐに見つめると、につこり微笑んだ。素直でまっすぐでぴかぴかで、友達になりたいと
どんな子でも思うようなそんな笑顔だった。育ちがいい、とはこういうことを言うのかもしれない。

——あなたは育ちが良くないから……。

二年生の担任に投げつけられたポウゲンがよみがえった。

「私は神崎彩子っていうの。子がつく名前なんてめずらしいでしょ。おばあさんみたい」

味噌っ歯が行ってしまおうと、彼女は [3] そう名乗った。ダイアナはやつとのことで首を横に振る。おばあ
さんだなんてとんでもない。神崎彩子——うっとりするくらい素敵な名前だ。きつとお父さんとお母さんが心を
込めて名付けたのだろう。

「私、一年生の時からあなたのこと知ってるの。中央図書館を使ってるでしょ」
「う、うん」

「私、何度もあなたのこと見てるよ。中央図書館でも貸し出しの数が多くて、ロビーのところに表彰状が飾ってあつ
たでしょ。パパがね、あなたをすっごく褒めてた。いっつも鞆にたくさん本を詰めて、あなたが一人で借りたり返
したりしているところを私達、何度か見たのよ。あんなにたくさん本を読むなんて偉いねえって。岩田先生も言っ
てたけど、ダイアナちゃん、すごいね。私、あなたと同じクラスになれて、とつても嬉しい」

まさか、自分の姿が誰かの目に留まってるなんて考えたこともなかった。この子と仲良くなりたい。心の中で何
かが静かに震え出す。彩子ちゃんと仲良くなったら、途方もなく楽しい毎日が始まる気がした。彼女を取り巻く穏
やかで澄んだ空気にどうしようもなく惹かれる。このチャンス逃したくない。彼女ならきつと自分を分かってく
れる。腹の底に力を込めた。アンにジョー、パッティにロッチェにエリザベス。物語のヒロインはいつだって勇敢で、
自分から人と繋がることを怖がらない。ああ、みんな、私に力をちょうだい。

「ねえ、あのよければ……。学校が終わったら、中央図書館に行くの。返却が今日までなんだ。一緒に……行かない？」
彩子は大きく目を見開いた。綺麗な顔にやさしい微笑が広がっていくのを、ダイアナは息を詰めて見つめた。カー
テンが風にふくらみ、ふんわりと二人を包み込む。教室の喧噪が一瞬遠のき、世界はダイアナと彩子だけのものな
なった。春が始まったばかりのしんと冷たくて、それなのに日向くさい風が頬をなでた。

(柚木麻子「本屋さんのダイアナ」による)

問一 —— 線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ～～～線部とありますが、ここでの「色」の意味を漢字二字で答えなさい。ただし「色」という漢字を用い
なさい。

問三 本文中の [1] [3] に入れるのに適当な表現を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア はにかみながら イ 探るような目で ウ つまらなそうに

問四 —— 線部(1)とありますが、どんな点を取り上げて「おかしい」と言っていますか。二点あげなさい。

問五 —— 線部(2)とありますが、みかげちゃんが「彩子ちゃんに一目置」くのはなぜだと考えられますか。わか
りやすく説明しなさい。

国語問題

(七枚のうちの五枚め)

問六 —— 線部③とありますが、ダイアナは特に物語が好きで、そこに登場する主人公の女の子たちにあこがれています。その理由を説明した次の文の [1]・[2] に入れるのに適当な表現を答えなさい。ただし [1] については自分で考えて漢字二字で答えなさい。 [2] については本文中から三十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

ダイアナは周囲から好奇の目で見られて、自分に [1] が持てないで引つ込み思案になっているが、物語の主人公たちは、 [2] 性格であり、自分にもいものを持つているから。

問七 —— 線部④とありますが、これはダイアナの心に変化が生じていることを示しています。その変化を「彩子ちゃんに声をかけられるまでは」に続く形で七十字以内で説明しなさい。

問八 本文についての説明として、あてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ダイアナは、鋭い人間観察や深い思考によって物事を捉える力を持っているが、自分の思いをあまり外に出さない無口な人物として描かれている。

イ ダイアナは、自分と対照的な彩子ちゃんにあこがれており、そのことは彩子ちゃんの顔立ち、服装、雰囲気などの細かい描写から読み取れる。

ウ 本文では、ダイアナ、みかげちゃん、彩子ちゃんなど登場人物それぞれの内面を細かく描くことで、繊細な少女たちの人間関係や成長をみずみずしく表現している。

エ 本文の最後に登場する風の描写は、ダイアナと彩子ちゃんの関係に今後良い進展が見られることを予感させる。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自分がしたいことを、どんどんやる。これは良いこととされていますが、はたして本当でしょうか？

「したいこと」は自分の内から湧き出た真実のように感じますが、必ずしも大切ではない気がします。ちょっとイメージしてみましょう。

大きな地図のなかを、親指くらい小さくなった自分が歩いているところを、外側から観察するとします。全体を眺めているあなたにはゴールが見えていますが、地図のなかの小さなあなたには、すぐ近くの道しか見えません。途中に、むらさきの美しい房をたらしたブドウがあれば、小さなあなたは食べたいと思い、立ち止まるでしょう。食べ終えてまた歩き出したとき、右手に面白そうな遊園地が見えてきたら、小さなあなたはちょっと遊びたいと思いい、そちらに足を向けるでしょう。

こうして道草をくってばかりいると、その一瞬は楽しくても、なかなかゴールにたどり着けません。

こんな具合に、「したいこと」のなかにはゴールに関係のない欲望がたくさん混じっているとします。お酒を飲む、ぱつと遊ぶ、気晴らしに買い物をする——それらはみな自分の内から湧き出たものですが、大切なことではないと思うのです。

一方、「やるべきこと」とは、ゴールに向かって成長していくために必要なことです。あくまで自分から発する行動で、仕事のノルマや誰かに強制された「やらねばならぬルーティン」ではありません。同じたとえで言えば、親指サイズのあなたの行く手に大きな川があったとき、ボートがなくても泳いで渡らなければゴールに近づけないこともあるでしょう。僕にとって「やるべきこと」は、こんなイメージです。

何かをするときは、その行動はあなたにとって「したいこと」なのか「やるべきこと」なのか、きちんと認識したほうがいいでしょう。

(松浦弥太郎「今日もていねいに。」による)

注 (1) ノルマ：割り当てられた仕事の量。

(2) ルーティン：日々の決まりきった仕事。

国語問題

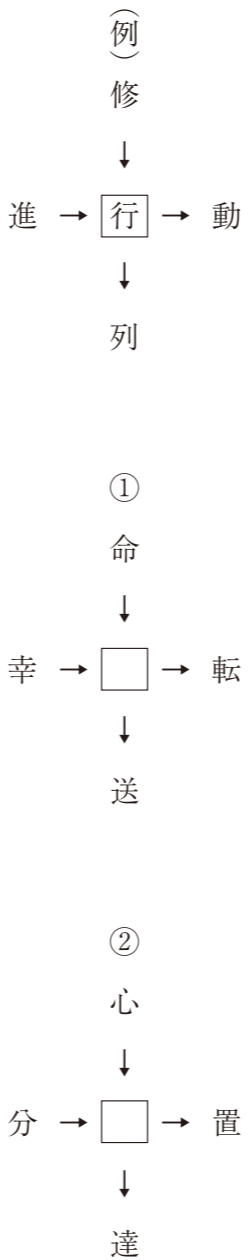
(七枚のうちの六枚め)

問一 〜〜〜線部 a・b は何のたとえですか。「の対象」という形で答えなさい。ただし、に入る言葉は、本文中から漢字二字で抜き出さなさい。

問二 〜〜〜線部とありますが、筆者の考える「したいこと」と「やるべきこと」とは、どのようなことですか。解答欄の形式に従って、それぞれ四十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

(Ⅱ) 次の小問に答えなさい。

問一 次の①・②のにそれぞれ適当な漢字一字を入れて、タテヨコの熟語を完成させなさい。



問二 〜〜〜線部の言葉の使い方が正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰もが**おぼつかない**ような意見を出した。
- イ 電車内は公共の場所だと**わきまえて**行動する。
- ウ 目の前におび**ただしい**景色が広がっている。
- エ 彼は誰にでも**良い顔**をするかたくなな人だ。

問三 敬語の使い方が正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 田中さんは**すぐお帰り**になりました。
- イ 一組の担任の吉田先生は**おりますか**。
- ウ **どうぞ**このケーキを**いた**だいてください。
- エ **あちら**の窓口**でうかが**ってください。